慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハロッド著 塩野谷九十九訳 ケインズ伝I
Sub Title	
Author	山部, 徳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.6 (1957. 6) ,p.544(100)- 549(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19570601-0100
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570601-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書は、経済政策の根本問題を研究しようとするひとびとにたいし、最新の学説と最新の問題をひろい分野にわたって紹介し、かつ批判し、しかも著者自身の「厚生経済」の理想をそこに貫ぬいて論旨の一貫性に注意を払っていることは高く評価すべく、また広く推称さるべき好著である。（東洋経済新報社　A5判　二三二頁　四五〇円）

（気賀　健三）

ハロッド著
塩野谷九十九訳

『ケインズ伝 I』

本訳書は、R. F. Harrod, "The Life of John Maynard Keynes", 1951. pp. xvi+674 の全訳三分冊の中の第一分冊であり、ケインズの生誕より、イートン、ケムブリッジを経てインド省への勤務、ついでまもなく、キングス・カレッジのフェローとなって経済学を講ずるに至る第一世界大戦前夜までの時期についてのべられている。

本書を読んでまず感ずるのは、ケインズ自身の個性の偉大さはもとよりであるが、同時に彼の人間を形成してゆく環境のすばらしさである。いかなる社会にあっても、その発展の為には少数の真の知識人を必要とすることは常にいわれていることであるが、なかんず

く英国の知識人の果す使命は顕著である。ケインズは、この使命を担う卓抜した人間性をもつと共に、共通の価値、共通の感情を共にするよき師、よき同輩にめぐまれていた。人間を形成するものは、単なる抽象的な「公理」ではなくて、まさに一つの社会過程である。ケムブリッジにおけるよき伝統と進歩主義は、本書を読む人々に感銘を与えずにはおくまい。ケインズの生涯を語る人は、必ずといってよい程、ケムブリッジにおけるケインズの「ソサエティー」活動を重視する。それは後にブルームズベリーと呼ばれるものに発展したのであるが、知性においてすぐれ、感受性の強いこれら青年達は、ヴィクトリア時代の苛酷で残忍な偽と偽善に満ちた態度に叛逆し、愛と美を基調とする調和ある人間関係を唱えるムーアの善の「理想」に心酔した。このムーアの「理想」は、当時の社会においては、決して空想的なものではなかった。ヴィクトリア時代の冷酷にして、無趣味なそして又便宜的な人間関係に対する「純粋な洞察力と熱情的な強烈さとを」もつものであった。彼等は、偉大な覚醒の前夜にあることを感じていた。大学生時代にケインズを夢中にさせた関心事は、正にこの哲学と、「ソサエティー」であり、真理の使徒として同輩の間にあって、精神と人格を完成しようとする追求とであった。しかし彼は決して青二才の理想主義者ではなかった。この点ケインズの本質的にリアリストである反面がうかがわれる。彼の鋭敏な心は、絶えず問題のあらゆる面を捉えていたことは特筆するにたることである。後年「思い出の記」の中において、彼が若い時代の自分自身について、「われわれは、文明なるものが薄い心もとない外皮のようなものであるということに気づいていなかった」そして「われわれは、先輩たちの人生の秩序を打ちたてるための並々ならぬ業績や彼等がこの秩序を保護するために工夫した精巧な仕組に敬意を払うという気が起らなかった」と書いている。がハロッドは、本書において、ケインズが既に学生時代にこのことを知っていることを指摘している。ケインズは一九〇四年の長期休暇に、バーク（一七二九年―九七年イギリスの政治家、作家）に関する論文を書いているが、この中で彼は既定の事物を擁護しようとする考え方を含めたこの著者の観点に多くの同情を示している。とまれ彼は「実際の決断を下すときは、反対の立場の長所のすべてをも認識し尽していた。」かくしてケインズは、時代に対する叛逆の種と論争家として彼が常に安全なるパイロットであることの素質を、学生生活において養成した。

第一章　家庭とイートン　ケインズは、一八八三年六月五日、ハーヴェイロード六番地、静かなケムブリッジの街中のどっしりした広大なヴィクトリア王朝風の家で生まれた。彼の父は、ジョン・ネヴィル・ケインズであり、論理学と経済学の講師として、また有能な大学管理者として著名はケムブリッジの教師であった。彼の妻は、実践的な性格をもち、多くの社会的な活動に関係していた。彼女は少年職業紹介所を計画した最初の人々のひとりであった。当時の英国は、物質的発展の力強い上昇傾向のうちにあり、イギリス帝

国の地位は揺ぎないものとなったかに見えた。その中にあって革新の気は次第に迫っていた。そしてケムブリッジでも新しい生命の鼓動が強く打っていた。それは古い伝統の故郷でありながらなお繁栄を続ける進歩的な場所であった。社会科学は認められつつあり、大学の改革は進行途上にあった。しかし事態は、この時期において尚安定しているかのようであった。これが半世紀後の時期にはある種の規律は馬鹿げたものであり、危惧と逡巡は根拠のないものであると見られるようになったのである。ケインズの生涯は、この二つの時期にまたがっていた。第一次大戦はイギリス帝国の安定と心配のない状態とハーヴェイロード六番地の既定概念とを根底から揺がす大きな力であった。一方には古い諸価値が新らしい環境のうちに保持されるためには、順応がどの程度必要であるかを理解しない保守的気質の人々がいた。他方には古い価値にはほとんど顧慮を払わない人々がいた。ケインズはこの間にあって彼の政策を立案する為みずからの能力にますます依存しなければならなかった。落着きを失った英国の中において、ケインズは後期ヴィクトリア時代のイギリスの特徴であったあの意図に満ちた態度、あの自信、そして合理的な討議によって改革を計画実行し、人類の進歩を推し進めることができるというあの信念を持ち続けたのである。ケインズの安定性と自信において、そしてまた進歩性において我々はケムブリッジ文化の表現を見ることができる。このようなケインズを育てた環境はどんなものであったか。以下簡単にのべてみる。父ジョン・ネヴィル

の人と交友関係が叙述されている。幼いケインズが当時のケムブリッジの学者達に接していることが記されている。ジョン・ネヴィルは、又マーシャルとも親密であった。マーシャルはいうまでもなく後年ケインズを経済学の分野に引き入れた人である。一八九二年（九歳）メイナードは、セント・フェイ予備学校（パブリックスクールへの予備校）へ入学。イギリスの知識人の常道を進んでいった。一八九七年イートンに入学。イートンの寮生活では、舎監と学級担任に加えて、おのおの一人ずつの指導教官がつけられている。個人指導と知的訓練の程がうかがわれる。ケインズが勉強に競技と学校生活全体とにひたむきに興味を傾むけたことは、彼と父との瀕繁な交信の中に充分うかがわれる。ここでは古典と数学に親しんだ。又各種のクラブの委員をつとめていることが記されている。

第二章　ケムブリッジの大学生　一九〇二年メイナードは、キングス・カレッジに特待給費生として進学した。彼は、ここで数学を専攻した。マーシャルが若くして数学を学び、シュムペーターが二十代に「本質」において、経済論理を展開していることを思い合わす場合興味深いものがある。さてハロッドは次の如くのべている。大学の教育が、「彼をあれほどの人物たらしめるに役立ったかぎりにおいて、教授たちは大した重要性をもたず、そのとき彼がキングスカレッジで送ることのできた特色ある団体生活と私生活とがすべてであった」と。「若い心の中の未完成の思想は、世間の因襲的な風説によって萎縮し、窒息せしめられ易い。大学においてはそれを死なせてはならない。それは議論において引出され、発展せしめられ、かつ吟味されるのであって、それによって若い人たちはそれぞれ自信を得るとともに、自己の天分を伸ばす力を獲得するのである。このことが達成される仕方は大学生活に特有なものである。それは軽躁と親密さとのある種の微妙な融合から成立っている。」メイナードは、ここで多くの討論会とか団体に所属している。そしてよき師、よき同輩の名と特質が、この章の殆どの頁に示されている。知的な潔癖性、燃ゆるような探究心、機智と冗談が読む者の心を捉える。その最高のものは、メイナードのいわゆる「ソサエティー」の入会によって展開される。そのころ、ケムブリッジには「ソサエティー」という名が知られた古くからあるクラブが存在していた。それは一八二〇年代に創立されたもので、テニスンとハラムはともにその会員であった。

かつてここではわれわれの
　若く親しき一団が、哲学、芸術、
労働を、また変りゆく経済や
　国の組織のさまざまを、論じ合いたる
日もありき、

この会の会員の選択は非常に巧妙であった。二十世紀のはじめには、大学生の会員は六名を超えたことはまれであった。そしてこの「ソサエティー」は秘密の会であった。この会において、有能な学問好きの青年達は、友愛的な共感と共通の知的趣味、共通の研究を見出した。その非俗物性と厳粛性、その感傷とユーモアと爆笑が、青年の「この上もない親密さ」の中で交錯していたのである。「ソサエティー」にとっては、真理こそが至高の目的であって、それに到達する手段が絶対的知的高潔性ということであった。これらのすべては、まさに青年達が満たそうと求めていた精神的渇望に対応するものでもあった。そしてこの「ソサエティー」で絶大な影響力をもっていた人は、先にも述べた如くムーアであった。「美的対象の享楽」と「人間交渉の楽しみ」。それらは疑いなく至高の善である。しかしこれにはケインズが「思い出の記」のなかで観察しているように、「ムーアが活動的な人生の諸性質を、また全体としての人生の型をいかに忘却しようと努めたかは注目に値する。」という批判がある。しかし当時にあっては、意義のあったことは、前述したところである。それは、青年に価値判断の転換と知性的興奮を湧き立たせた。我々は、ここでもう一度ケインズの「思い出の記」の一節を引用しよう。「われわれは、連続的な道徳的進歩を信じ、その進歩のおかげで人類は現在すでに真理と客観的規範によって動かされる信頼し得る合理的な慎み深い人々からなり立っていると考え、しかもこの人々は、因襲や伝統的規範や行動に関する非伸縮的な束縛から解放し、今後は、善を実現するために彼等自身の賢明な計画や純粋な動機や信頼し得る直観にゆだねておいてなんら心配のない人たちであると信ずるユートピアン、あるいはまた時に社会改良主義とも呼ばれる人たちの最後に加わっていたのである。……われわれ

の一般的な気持の原因および結果として、われわれはわれわれ自身を含めての人間の本性を完全に誤解していた。われわれが人間の本性の属性と考えた合理性が、判断のみならず感情の浅薄さを導いたのであった。」レプケをしていわしめれば、いわゆる「合理主義者」「知性主義者」の悲劇である。しかしこういったからといって、我々は、人間の理性を軽視してはならない。ケインズ自身いわゆる「合理主義者」としての単なる思い上りや、自壊作用を起こすことなく、よく新しい時代の指導者としての職責を果しているからである。試みにこの「思い出の記」は一九四二年に書かれている。またケインズ自身公的な地位をもたず、いかなる支持団体をももたず、いかなる政党に属するかもほとんど知られず、地味な生活とそしてしかも英国の「頭脳」として合理的な立場に終始したのである。後半のブルームズベリーにおいては、人間性の多様性と精神に対する分析の傾向が更に押し進められ、ケムブリッジの伝統である非世俗性と痛烈な批判精神が生々として脈動していたのである。とまれムーアの善の「理想」は実現される前に多くのことが考えられ、多くのことが試みられ、多くのことが経験されなければならない。この時代のケインズは、人間に対する情熱と探求の中にあった。「……僕は自分の主たる慰みをプラトンとシェイクスピアの二人に見出している。情熱と知性との真の結合を見出すことがかくも困難なのはなぜだろうか。……熱情的な知覚を措いて他に価値のあるものが存在するであろうか……」（一九〇五年四月）と彼は親しい友人にあてて手紙をかいている。一九〇五年六月数学科優等卒業試験に第十二位の順位が与えられた。

第三章　人生の行路をもとめて　このようなメイナードの進んだ道は、心ある青年の一度は経由する道である。しかし彼は特殊な傾向の心理や個人的興味にあまり夢中になりつつありはしなかったか。ひっきょう、彼は詩人となるべき運命になかった。彼は偉大な知的かつ実践的天稟を備えており、しかもそれは明らかにある種の活動的な職業の卓越した経歴を暗示するものであった。メイナードには、均齊をもたらす為のものが必要であった。元イートンの教師であり、登山家として著名なヤングは、卒業試験の後八月メイナードをスイスに登山の為連出している。しかしメイナードは、自然の馬鹿らしさについての手紙を親しい友に出している。当時の彼は、救い難い知識人であった。優等卒業試験とスイスでのこの休暇との間に、彼はすでに経済をいくらか真剣に読む時間を見出していた。六月二十八日の父ケインズ博士の日記に「メイナードはいませいだしてマーシャルの経済学原理を勉強している」とある。秋学期には、マーシャルの講義に出、週一回ピグウと朝食を共にし、経済学の指導をうけている。しかしこの頃においても、ケインズの主たる関心が「ソサエティー」とその交友に対して向けられていたことは、おびただしい書信からうかがわれる。一九〇六年八月、文官試験に第二位で通過、インド省に就職した。この試験において、経済学は第八位か九位であった。これに対してメイナードは、「私は明らかに経済学について試験官たちよりも知っていた。」と後にいっているが、ハロッドも之を肯定している点が見受けられる。インド省の勤務は彼には退屈であったらしい。キングス・カレッジのフェローとなる為確率論の勉強がなされている。一九〇八年六月インド省を辞めて、マーシャルの紹介によりカレッジの講師に就任している。しかしインド省における二年間は彼に大きな影響を与えた。彼はインド問題に興味をもった。ルピーの問題は当時貨幣分野における重要な問題であった。彼はこの問題を取り扱うことによって経済学者としてデビューすることになったのである。又彼の「確率論」にも幾多の興味ある問題が見受けられる。

第四章　キングス・カレッジのフェロー　メイナードは、すぐれた理論家であり、若い時代には数学的体系の彫琢に多くの時間を費した。しかし彼は経済学としての優秀さを記号操作の熟達と混合せず、諸制度を研究することの必要性とそれらの内部的な作用様式の理解を得ることのむずかしさを十分認めていた。ケインズは、カレッジにおいてきわめて多忙な講師であり、しかも非常に実証的具体的な講義を行っている。原論、貨幣、金融がその講義内容であった。一九一三年「インドの通貨と金融」を完成。インド問題については、既に一九〇八年より「エコノミック・ジャーナル」等に幾多の論文を載せていた。この論文著作で、彼は金本位制度からの脱却とそれに代る管理通貨制度の樹立を暗示している。論争家としての、更にプランメーカーとしての彼の本領が漸く熟しつつあった。この時代の主たる関心は、インドやそれに類似した国のために金為替本位を唱道することであった。彼は金通貨を望む人々、つまり反動主義者たちに反対して、痛烈な議論と諷刺の力を発揮した。インド通貨研究の為の王立委員に任命されたケインズは、幾多の反対を排除し、インド経済発展の偉大な前進の端緒となるべき貨幣計画の草案をつくりあげたのである。時に年齢三十歳になったばかりであるが、三十年後には、彼はブレトン・ウッズで一層大きな仕事をしなければならなかった。

第五章　ブルームズベリー　このような経済学への精進のかたわら、「ソサエティー」以来の親友とは絶えず交っていた。これらの友は、既に夫々の知的分野において活動し始めていた（主として文学芸術の方面において）。世に彼等の一団は、ブルームズベリーと称せられている。そこには、新らしい自由な物の考え方と知的激動の新芽と人間性に対する豊富な理解と愛情とがあった。それは来るべき英国の激動期を予感し、覚醒の前夜にあることを感じている人々の一団であった。学生時代の理想と交友は、卒業後急速に荒廃していく常の世にあって、彼等の交友のきずなは愈ゝ強く、ブルームズベリーという文化史上の一時期を劃したのである。成程彼等は、よき時代に、めぐまれた環境に育成した人々ではある。しかしながら価値と愛情に対する真剣な追求とウィット、ユーモアーの中に行われる交友の温さには心をひかれるものがある。以上第五章において第一分冊は終っている。（東洋経済新報社　A5判　二八二頁　三八〇円）

（山部　徳雄）